

環境問題 生態学の立場から

H17.6.23 黒河

工学の問題には答えがあり、技術者たちは答えを追及し具現していく。
一方環境には答えがない。我々は自分の環境とか、人間の環境ばかりが気になるが、
実は生き物の数だけ環境問題は存在する。一方でいい環境でも、他方では破壊的な影響を
与えることがある。

堰堤の清掃をすることにはほとんど反論がないだろう。だが草を刈ること、草を抜くこと
から問題がはじまる。秋の七草といわれるフジバカマはいまでは極端に数をへらし、キキ
ョウ、リンドウ、オミナエシも同様である。自然に手を加えればかならず影響が発生する。
河川の状況を変更すると、これまでの生態系を破壊するかもしれない。
(秋の野に咲きたる花をおよび折りかき数ふれば七草の花(万葉集))

自然は純粋培養を許さない。自然に放置すると多様な生物が共存し、単純種にならない。
農作物を育てるのには多大な労力が必要であるのはこの理由による。
菜の花、コスモスなどを純粋培養するには多くの労力が必要であることを知る必要がある。

直蒔き混播(じかまきこんぱん)という緑化技法がある。30種以上のくさばなの種を混ぜ
直蒔きし、連続的に多彩な開花状態を演出する技法だが、1~2年は驚くほど美しいが3~4年た
つと、美しい花は姿を消し、5~6年もたつと雑草のほうに優勢となる。自然は種の多様性を好み、
多自然型の方向に進む。

われわれの環境改善の行動はたえず、絶滅危惧種の問題、外来種の問題などに出くわすことも
おおい。ある植物の駆除はそれに住み着くスペシャリスト(その植物しかたべない)たちも駆逐する。
とくに現在は種の大量絶滅期といわれ多くの種が絶滅している。この原因はこれまでの気象の変
動などではなく人間の行動が原因である。Red Data Bookに関心をもとう。
われわれの行動がそのような批判にさらされないような対応が必要である。

環境を変化させると、いい、わるいは別にして、かならず影響があらわれる。自然にしつpegえし
されないように注意しよう。環境変化の影響は10年単位でないと結論がでないことも多い。

どうすればいいか

何もしないのがいいと言っているのではない。どうすれば環境創生になるのかを検討する。

日本の自然はそのほとんどが2次的自然であり、人の手が入っている。

ただし環境問題には必ず逆の意見も存在することを認め覚悟する必要がある。

- 1) 事例をよく調査しよう。それにはらわれた労力、効果をふくめて
とくに長期間存在し成功している事例を調べよう。
- 2) 有識者の意見も聞いてみよう
- 3) みんながいろんな角度から眺め考えてみよう
- 4) 景観だけでなく多自然、種の多様性にも配慮しよう

以上